
シンデレラ・コンプレックス

藍田陽介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シンデレラ・コンプレックス

【Zコード】

Z0709E

【作者名】

藍田陽介

【あらすじ】

「手のお嬢様、麗良に太郎が恋をした。大学で出会い、互いに愛し合つ二人の前途は多難！一人が身分の違いを乗り越えて、恋を成就できるのか？」

(前書き)

短い物語です。ほんのわずかの時間で読める、一話完結のお話です。
現代のシングルストーリー、どうぞお楽しみください。

恋に貴賤はない。よくそういう言葉を耳にするけれど、麗良はその言葉が嘘だと知っていた。なぜなら麗良は上流階級の生まれだつたから。東京は山手の一角に豪邸を構える神出家の一人娘、それが麗良の出自である。

麗良が生まれてから、徳之も雅乃も一人娘の彼女をそれこそ目に入れても痛くないほど可愛がつた。特に父である徳之など、まだ麗良が赤ん坊のときに目に入れようとしたほどだ。もつとも思わず「痛つ」と叫んで、麗良をベッドに戻したらしいが。

麗良はこうして徳之の財産と母、雅乃の愛に育まれて、十八の歳を迎えた。晴れて大学生となつた麗良は、生まれはじめての恋に落ちた。

同じ大学の一年先輩、坂本太郎。名前は平凡だったが、容姿は整っていた。引き締まつた顔に鍛えられた肉体。それに背も高く、麗良は一目見て、太郎に恋してしまつたのだ。

山手のお嬢様の典型であり、容姿も申し分なく美しい麗良が思い切つて声をかけたとき、太郎にもまたキューピッドの矢が射抜かれた。その日、麗良は太郎を、よく行く赤坂の和食料理店へと誘つた。太郎には見たこともないような料理が、目の前に並べられた。上品に少しずつ盛られた皿が、次々と目の前に運ばれ、二人は極上の料理でお腹を満たし、何度も交わした視線で心を満たした。

だがやはり恋に貴賤はあるのだ。二年間、二人は仲睦まじく、誰にも邪魔されることなく交際を続けた。時にいつか一人で行つたような高級料理店にも出入りしたが、麗良がいる限り何も臆することはなかつた。太郎は決して、麗良の背後にある莫大な財産と付き合つつもりはなかつたが、彼女が持つてゐる財産のほんの一部で素敵な食事ができることは、彼にとつて天恵といつてよかつた。もちろん

ん麗良も自分の財布に入っている金色のカード一枚で、彼の堅く締
まつた顔が笑みで崩れるのを見ることができるのだから、たかだか
月に一回くらい一人分の食事代を払うことなど、何でもなかつた。
麗良は何より、彼のこの笑顔が大好きだつたから。

一年経つたある日、麗良は太郎を自分の住む家に連れてきた。太
郎は神出家の邸宅を外界とさえぎる大きな門の前に立つた。門の奥
にのぞく瀟洒な家を見た途端、彼はまるで痴呆症患者にでもなつた
かのように大きな口を開けたまま、動かなくなつた。心配した麗良
が彼の腕をつかむと、我に返つたように大きなため息を吐いた。
まるでお城みたいだな。

正直なところ、太郎は多少の、いやかなりの気後れを感じたが、
麗良に促されてその「お城」に足を踏み入れた。

応接間で徳之と雅乃が待つてゐるはずだ。麗良は太郎を先導して、
大きな大理石張りの玄関で靴を脱ぐと、お手伝いの麻耶まやが用意した
スリッパに足を入れ、すべるような足どりで応接間へと向かつた。

太郎もこの日のために麗良が逃えたスーツを着こんで、馴れない
服と雰囲気に気圧されながら、麗良の後を追つた。

麗良は応接間に入るとすぐに、太郎を恋人として紹介した。しか
し政治家として名を馳せ、人を見抜くことにかけては自信があつた
徳之は、瞬く間に太郎に「恋人失格」の烙印を押した。

こんなどこの馬の骨とも判らぬ男に、大事な麗良をやれるもの
か。

「坂本太郎くん……といったね。君はどこの出身かね」

「はい。両親は栃木に住んでいます。僕も……そのう、高校までは
親元で暮らしていました」

「それで両親は、どんな仕事をなさつてゐるのかな」
「祖父の代から農業をやつてゐます。父も祖父から継いで、百姓を
やつてゐるんです」

緊張しながらも太郎は胸を張つて応えた。だが徳之が麗良の恋人
候補のリストから、太郎を消すのに、この会話で十分だつた。

「ところで君、今日着ているそのヴェルサーのスーツは、どこで買ったのかね？」

問いかけは太郎へのものであったが、徳之の視線は真っ直ぐに麗良に向けられていた。麗良は思わず俯いた。

ヴェルサーは父が好きだったんだわ。別の店で買えばよかつた。

結局太郎も、麗良も徳之のその問いかけに応えることはなかつた。しかし徳之がすべてを了解していることは、その場にいる全員が察していた。

「残念だが、君をうちの麗良とお付合いさせることはできないな。実に残念だが……。もし君が麗良と付き合いたいのなら、せめてヴエルサーのスーツを自分で買えるよつになつてから、また来ることだ。いいね」

「お父さま！」

麗良が何とか太郎に対する父の気持ちを翻意させようと、懸命にすがつたが、徳之は「駄目だ」と首を横に振るばかりだつた。麗良にしてみれば、今まで自分の望んだものを全て与えてくれた愛する父が、こんな仕打ちに出るとは思つてもみなかつた。あまりの落胆に麗良はその場で泣き崩れ、太郎は仕方なく肩を落として、自分の住む六畳一間のアパートへと引き揚げた。

それからも二人は時々キャンバスで会つたが、食事をすることはなくなつた。以前のように愉快な気持ちにはなれなかつた。徳之の出した条件、それは二十一歳の太郎にとつてあまりにも途方もないものだつたし、麗良も久しく、あの大好きな太郎の笑顔を見ていないかつたから。

太郎には、逞しく畠を耕す父と母から受け継いだ根性があつた。彼は一念発起して、国家試験を受験するための猛勉強を始めた。

麗良のお父さんに認めてもらつたために、俺は国家公務員になつてみせる。官僚になるのだ。そうすれば、俺のことを見直してくれる

に違いない。麗良との永遠も約束される……。

麗良はたびたび「会いたい」といつて電話をしてくる。しかし太郎は「今は会えない」といつて、彼女の申し出を断つた。麗良はひどく嘆いたが、太郎には試験まで時間がなかつた。将来の麗良との時間を約束するためには、今は彼女と会うための時間も勉強に費やす必要があつた。このわずかな期間の後に訪れる試験は、太郎と麗良の将来を合否判定する試験でもあつた。

一方麗良は、太郎との交際を父に反対されてから、日に日に口数が少なくなつた。徳之は自分の下した判断は間違つていないと思つていただが、明るかつた我が娘が元気を失つていくのを見るのは辛かつた。

ある日、徳之は思い切つて麗良に聞いてみた。なるべく優しげな慈愛に満ちた笑顔で。

「麗良、以前連れてきた坂本君のことだが……」

はつと麗良は顔を上げ、徳之の方を見た。その目にはうつすらと涙が浮かんでいた。徳之は視線をそらして、なるべく麗良の顔を見ないようにしながら続けた。

「彼はあれからどうしている?」

麗良はもはや流れる涙を拭うこともせず、嗚咽の間に間に応えた。「お父さまが……あんなひどいことをいうから……、太郎さんは勉強を始めたわ」

「ほう、一体何を勉強しているんだい」

「お父さまに認めてもらうんだ……そういうて……、国家公務員の試験を受けるための……勉強をしているわ」

麗良の言葉は、途切れがちで聞き取り難かつたが、それでも太郎が勉強を始めたことはわかつた。徳之は「ふむ」と曖昧な返事をすると、麗良の部屋から出て、そつとドアを閉めた。

太郎の努力は、麗良への想いへと結実した。翌春、彼は国家公務

員に合格したのである。それは麗良を我が手にすることのできるチケットでもあった。栃木で父とともに畑を耕す代わりに、彼は霞ヶ関の財務省へと通う身となつた。太郎の父もこれで畑を耕す継ぎ手はなくなつてしまつたが、息子の快挙を喜んでくれた。

財務省に入省後、五年経つて彼はめでたく麗良と結婚した。正確に言えば、養子として、神出太郎となつたのである。いづれは父となつた徳之の後塵を拝して、議員となることも夢ではない身となつたのだ。

神出麗良と結婚し、高級官僚となつた彼は、財務省の中でも一番といつてよいほどの出世頭となつた。一番信じられなかつたのは、太郎自身だつた。太郎は持ち前の粘り強い性格で、入省後も懸命に働きはしたが、それにしても自身の出世スピードは異常と思えるほど速かつた。つい先日までは寄る辺ない身だつた自分が、今や一躍スターダムにのし上がり、シンデレラボーイとなつたのだ。

さてこの物語は、愛する女性のために一心不乱に努力して、成功を掴んだある男のサクセス・ストーリーである。だから本當なら、この話はここで終わるべきであろう。

けれどもやはり話は、余すことなく正確に伝えるべきだ。

あまりにふわふわむ麗良を見かねた徳之は、愛する娘に暖かい手を差し伸べようとしていた。麗良は太郎のことを諦めてはいない。しかし徳之は己の娘に「畑を耕す男」を与えるわけにはいかないと考えた。

一晩考え抜いて、麗良が太郎を連れて徳之の前に現れた翌日、彼は太郎に短い電話をした。彼の電話番号など、徳之が秘書官に指示をすれば、調べることくらい訳はなかつたのだ。

そうして何事かと思いつつおずおずと電話に出た太郎に、徳之はこういったのである。

麗良とのことを認めてもらいたいなら、せめて国家官僚くらいにはなりたまえ。そうなれば私も、もう一度君に会つても良い。だが私が君に話したことは、麗良には内緒だ。いいね。

一週間後、彼のオフィスで秘書官の高村を呼んだ。

「高村君、先日お願ひしていた件だが、大丈夫かね」

「ええ、お任せ下さい。私と大山財務大臣の秘書をやつている橋本くんとは旧知の仲なんです。そのつてでお願いしたところ、大臣も快諾されたといつていきましたよ」

「そうかい、それは良かった。じゃもう安心していいんだね」財務大臣へのコネがある高村は、その点便利な男だつた。徳之内矢継ぎ早に、高村に指示を出した。たいしたことではないのだ。たつた一人の男を国家公務員試験に合格させ、財務省に入省させればよかつたのだから。

(了)

(後書き)

是非とも感想をお寄せいただければ幸いです。よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0709e/>

シンデレラ・コンプレックス

2010年10月8日12時44分発行